

音声教育と日本語能力

戸田 貴子¹

キーワード

音声教育 日本語能力 コミュニケーション 学習目的 多様化

1. はじめに

近年の日本語学習者の多様化に伴い、学習目的も多様化している。職業的動機・学術的関心のために来日し、高度の日本語能力の獲得を目指す日本語学習者も少なくない。本論考では、このような日本語学習者を対象とした音声教育について述べる。

本論考では、まず、音声教育が発音だけではなく、日本語教育の諸領域と関わっていることについて言及する。次に、音声教育を行う理由を挙げた上で、音声教育が目指すものについて私見を述べる。最後に、教育実践から具体例を挙げ、音声教育と日本語能力の関係について論じていきたい。

2. 音声教育の範囲

音声教育は発音のみを単独で扱うものではなく、日本語教育の諸領域と関わっている。

口頭表現能力に音声に関与することは明らかであるが、聴解にも音声的側面が関係している。このことは、ディクテーションにおいて清濁や長短の混同が起こったり、促音の挿入や脱落が見られたりすることからもわかる。日本語学習者による文章表現にも、単なる表記上の間違いではなく、音声的原因による誤用が度々見られる。漢字には音読み・訓読みの発音や音便のように、音声的要因が関与している。また、熟語形成の際に起こる連濁や転音（例：上着→うわぎ、雨具→あまぐ）についてもよく知られている。語彙においては、単語のアクセントはもちろんのこと、縮約語、複合語、外来語などの形成過程にもモーラやアクセントなどが密接に関わっている。同様に、文法と音声にも密接な関係があることが指摘されている。たとえば、テ形の活用にも音便が関係しているし、終助詞には文末イントネーションが関わっている。

話し手の表現意図は表現形式のみにより伝達されるのではなく、発音の仕方によっては聞き手に伝達される表現意図が全く異なることすらある。たとえば、待遇表現において、丁寧さを伝達する音声には一定の特徴があることがわかっている。この特徴を無視した場合、いくら表現形式上は丁寧度が高くても、聞き手には丁寧聞こえない。また、あいづち、フィラー、言い淀み、ポーズなどにおける音声的要因が、談話の展開に影響を及ぼす

ことも指摘されている。

音声は日本語教育の諸領域と関係しており、音声を媒材とした話しことばにおけるコミュニケーションの基盤となるものである。したがって、広義の音声教育は日本語教育全体に関わるものであり、日本語能力の向上のためには音声を無視することができない。このことを踏まえた上で、戸田(2004)は「コミュニケーションのための」という明確な目的意識を学習者と共有した上で行う音声教育実践を提案した。しかし、紙面の都合上、上記のすべてについて言及することはできないため、本稿では発音を中心に述べていくことにする。

3. なぜ音声教育を行うのか

日本語教育における音声教育の位置づけについては、一般に議論されることが少なく、統一見解も得られていない。したがって、本論者は筆者の音声教育観に基づいて論を展開していくことになるため、まずは音声教育を行う理由について、私見を述べておきたい²。

- 1) 音声は話しことばにおけるコミュニケーションの基盤となるものであり、口頭表現、聴解、文章表現、漢字、語彙、文法、談話、待遇表現など、日本語教育の諸領域と関わっているからである。
- 2) 日本語学習者の音声上の問題が、コミュニケーションに影響を及ぼすからである。話者が言いたいことを伝えようとしても、発音の問題が理解可能なアウトプット産出の妨げとなることがある。
- 3) 意味が伝わったとしても、話者が意図しない印象を聞き手に与えてしまうことがあるからである。たとえば「わたし(私)」「ひとぢゅ(一つ)」「むぢゅかしい(難しい)」というような発音は幼児の発音を連想させることから、幼稚であるとか、子供っぽいという印象を持たれることがある。
- 4) 発音の問題は、学習者の情意面にも影響を及ぼし、日本語学習全体における消極的な学習姿勢や学習不安を引き起こす原因になるからである。
- 5) 学習ニーズがあっても、学習機会が少ないからである。音声的側面は無意識に陥りやすく、教室外で学習者が接触する母語話者には漠然とした「指摘」はできても、「指導」ができるとは限らない。
- 6) 日本語学習者が多様化しており、学習目的によっては高度の音声習得が求められるからである。

近年、学習者の多様化に伴い、最近の日本語教育・研究の動向においても変化が見られている。以下は『日本語教育』142号の特集テーマ「日本語の音声の教育と研究の新しい流れ」の一部を引用したものである。

学習者音声の研究・調査には大きな変化が起きています。実験心理学的手法や器械的分析などの量的研究がかつては主流でしたが、近年では学習者の情緒的側面や社会的ネットワークの分析といった質的方法によって音声習得に関わる要因を明らかにしようとする試みが行われています。また、社会情勢の変化の一例として、正確なコミュニケーション能力を要求される看護師・介護福祉士候補者等の受け入れが準備されており、日本語音声教

育の重要性が再認識されています（助川ほか 2009）。

上記の職種以外にも、学習者の日本語能力に正確さが要求される場面に遭遇することがある。その一例として、日本語母語話者（NS）による非母語話者（NNS）俳優の台詞の音声に対する評価を分析した羽澤（2008）を挙げたい。演出家、プロデューサー、NS俳優、制作事務、国際担当、広報担当、営業担当者など、NNS俳優を取り巻く人々に協力を依頼して行った調査の結果、外国人の役などの特別な演出意図がある場合を除いては、外国語訛りがある音声は許されないことが明らかになっている³。わざわざ劇場に足を運ぶ観客は非日常的の行為である演劇鑑賞に十分に浸れない要因を嫌厭する。このため、外国語訛りは「個性」の範疇外であるという。また、観劇の費用に比例して（外国語訛りに対する）許容度が低くなるという厳しい現実が浮き彫りになっている。音声表現力はプロの俳優の条件として不可欠であり、母語干渉を受けた台詞の発音は、NNS俳優にとって大きなマイナス要因となる。

NNS俳優の日本語教育を担当する劇団専属の日本語教師は、NNS俳優の目指す日本語能力の達成のために音声的な正確さを意識した指導を行わなければならない。それは規範や同化のおしつけではない。最終目標は彼らが目指す日本語能力を獲得し、俳優として活躍すること、すなわち夢をかなえ、自己実現を果たすことである。今後益々多くの業界において、このように国境を越えて自らの才能を開花させ、活躍の場を広げていくNNSの増加が見込まれる。

早稲田大学においても、数多くの留学生が日本語教育の専門家になることを目指して来日し、日々切磋琢磨している。しかし、在学中の留学生からは発音の問題のために日本語の口頭発表や授業実践に自信が持てないという悩みや、帰国した修了生からは母語訛りの強いNNS教師の授業は学生からの評価が低く、受講生が少なくなってしまうといった厳しい現実が語られる。

成人してから高度の音声習得が不可能であれば、音声教育実践の根柢に乏しいが、学習者の意識や学習方法次第で発音の能力は向上することが研究成果から裏付けられている（戸田 2008、2009）。音声教育を行う理由のひとつとして、最後にこのことを付け加えておきたい。

4. 音声教育は何を目指すか

音声は母音・子音といった言語形式的側面から、言語の構成要素として捉えられがちである。言語教育の現場では、日本人英語学習者には /r/ と /l/ という子音の区別が困難であるとか、韓国人日本語学習者は「ツ」を「チュ」と発音するというように、単音レベルの問題が指摘されることも多い。しかし、音声は単なる言語構成要素の集合体ではなく、音声教育はそれらをうまく産出できるようになることだけを最終目標としているわけではない。本章では、筆者自身の英語学習と日本語教育経験から音声教育の目標について述べていきたい。

1980年代に、筆者はオーストラリア国立大学に学部一年生として入学した。アジア系オーストラリア人が多く、外見だけでは外国人であることが判断されにくい環境の中で、

第一印象に一番大きな影響があったのが英語の発音である。当初は奨学金も仕送りもない私費留学生としての経済的不安と、外国で初めて一人きりで生活していけるだろうかという精神的不安を抱え、社会における新参者であることを他者にアピールするために、敢えて日本語訛りの英語発音を使っていた。それは筆者にとって他者依存を示す協力要請のストラテジーでもあった。

その後、大学生活にも慣れ、友人にも恵まれ、アルバイト収入も得て、新たな生活基盤を構築した頃から、オーストラリア社会の構成員としての自覚が目覚め、英語の発音が変化した。帰属するオーストラリアのコミュニティにおいて他者と対等で良好な関係を築くため、日本で受けた英語教育が米英語の発音であったにも関わらず、意識的にオーストラリア訛りの英語を話すことが多くなった。

1990年代に入ると、母校のオーストラリア国立大学で専任講師として教鞭をとるようになり、安定した収入を得ることができるようになった。それまで在留資格は学生ビザであったが、就労許可が与えられ、専門職を持つ外国人として永住ビザを取得した。また、博士課程に在籍し、国内外の学会での研究発表や学術誌への論文掲載など、精力的に研究活動に取り組むようになった。この頃から、以前のようにオーストラリア社会の構成員からどのように見られているかということを中心に自分の立ち位置を判断するのではなく、知識・教養のある一個人として自分にできる社会貢献・学術貢献とは何かを考えるようになっていった。その結果、専門外国人として、研究や教育について母語ではない英語で話すとき、前述のように同情を得るための日本語訛りでも、不必要に媚びた印象を与えかねないオーストラリア訛りでもない、自分を表現するための発音を改めて意識するようになった。

このような経緯を経て、オーストラリア社会における筆者の英語の発音は変容していった。筆者にとって英語の発音と意識の変容は、オーストラリア社会における自己の成長とアイデンティティに密接に関わるものであった。それは、単なる母音・子音といった言語の構成要素を遥かに超える意味を持っていた。

また、生活者として地域に定住する筆者に数多くの示唆を与えてくれたのが、常に身近にいた親友や隣人の英語の発音である。イタリア系移民の母親のイタリア語訛りの発音と、シドニーで生まれ育ち、イタリアに住んだことのない子供達の発音は全く異なっていた。また、自らをABC (Australia-born Chinese) と呼ぶ中国系オーストラリア人の発音と、その両親の客家方言の影響を強く受けた発音からは、全く異なる聴覚印象を受けた。同じ家族でも、その構成員の生育地や、オーストラリアのコミュニティに対する心的距離によって英語の発音は多様であり、社会の中での個人の生き方を映し出す鏡のようであった。

日本語教師として教鞭をとり始め、学習者の言語文化背景の多様性ととともに、異なる母語の影響を受けた日本語発音の多様性にも気づかされた。それは、意味が伝わりにくいだけでなく、聞き手に思わぬ印象を与えてしまう原因にもなっていた。たとえば、前任校で出会った日本語学習者は、「筑波大学で物理の研究をしています」を「ちゅくばだいがくでぶちゆりのけんきゅをしています」と発音していた。専門的な研究を行なうために来日し、日本語能力も高かった。しかし、このように母語干渉を強く受けた発音は日本語母語話者には幼児の発音を連想させることから、本人の持つ知的な印象とはかけ離れてい

た。このため「自己紹介のとき笑われてしまうので、発音練習がしたい」という。日本語教育関係者の立場からは、非母語話者の日本語に対する日本人の意識改革が必要であることは言うまでもない。しかし、学習者の立場からは、発音練習は単に正確な発音を目指すためではなく、本来の自分を表現する日本語に近づくためのプロセスであるように思われた。

冒頭で述べたとおり、日本語学習者の学習目的の多様化が著しい中、学習者の目指す日本語能力や日本語教育の目的は一律ではなく、個人、レベル、状況などによって異なっている。また、学習が進むにつれ、学習目的も更新されるため、学習段階によって、一個人であっても目指す日本語能力は変化していく。現在、日本語教育はこのような状況への対応を迫られている。音声教育についても同様で、一律に母語話者レベルの発音の獲得を目標とした音声教育や母語話者を規範とした音声能力観は問われるべきである。音声教育の目標は、学習者自身が目指す日本語能力の達成を支える音声表現力の育成であると考えられる。それは単なる言語構成要素としての音声上の正確さではなく、目標言語が話されている社会の中で自己実現を果たすために、聞き手に伝えたい内容・気持ち・印象などを自由に表現できる音声を目指すものである。

5. 音声教育はどのような能力を育成するか

本章では、教育実践から具体例を挙げつつ、音声教育が育成する能力について述べていきたい。前述のとおり、学習目的の多様化に伴い、日本語学習者の目指す日本語能力は一様ではなくなっている。ここでは、大学生・大学院生を対象に行われている音声教育について述べていく。

早稲田大学には「発音 1、2、3、4、5」「伝わる発音・使える文型 2-3、3-4」「コミュニケーションのための日本語発音 5-6」「会話の発音 6」「スピーチ・プレゼンのための日本語発音 7、8」などの発音関連クラスが設置されている。各クラスの到達目標や学習者の日本語レベルが異なるため、本論考では筆者が担当する「コミュニケーションのための日本語発音 5-6」について述べていきたい。2010 年春学期（15 週）の登録者数は 43 名、複数のボランティア、実習生、TA を含む約 50 名の参加により、毎週 1 回（90 分）の教室活動が行われた⁴。

本講座の目標は日本語のコミュニケーションにおいて、聞き手に伝えたい内容が伝わる発音で話せるようになることである。この目標を達成するために、次のような能力を育成していった。

1. 音声に一定の規則や型があることを理解し、母語と日本語の音韻的差異を把握し、音韻知識を実際のコミュニケーションにおいて運用する能力。
2. 文字に現れない要素が多く無意識に陥りやすい音声特徴を意識化し、自分の問題点を発見しつつ、発音に注意を向けて話す能力。
3. 発音の学習方法を身につけ、工夫をしつつ、自律的に学習を継続していく能力。

自然環境において日本語のインプットを大量に与えれば、学習者が母語と日本語の音韻的差異に気づくわけではなく、日本語独自の形態統語的制約や韻律特徴が関与するため、

意識化なしには短期間で高度の音声習得の達成は難しい (Toda 2006)。週1回の対面授業での活動に加え、教室内外において発音を常に意識することが望ましい。そこで、早稲田大学のオンラインシステム CourseN@vi にオンデマンド発音練習システムを提供し、24時間いつでもアクセスできるように学習環境を整備した。また、日常生活の中で接触する日本人の生の声や、ニュース、ドラマなどを活用して、毎日無理なく発音練習を継続できる仕組みを作った⁵。

以下に、学期終了時に学習者から寄せられたコメントの一部を紹介したい。

今学期コミュニケーションのための発音を受講することによって日本語の発音の仕組みを理解し、自分の発音の問題点を見つけ、自然な発音に一步近づくことができました。短い期間に発音が滑らかになることができたのは毎日継続したシャドーイングとオンデマンド発音講座があったからだと思います。(中略)1学期の間、この授業を履修し、自分の発音の弱点が分かるようになり、発音により注意を注ぐようになりました (Nさん)

受講する前と比べると、日常会話を含めて全般的な日本語の会話において、相手に自分の言いたいことをもっと正確に伝えられるようになったのが感じられます。(中略)このように、私は今学期の授業を通して、日本語にもう一步近づき、発音に対して感じていた漠然とした恐怖を取り除けたことが一番の成果だと思います。ひとりでの練習のコツもつかめたのでこれからも常に意識しながら発音の練習をやっていこうと思っています (Hさん)

練習すればするほど、日本語のアクセントやイントネーションに対する意識が高まったばかりでなく、聴解の能力も高まった。(中略)今の私は先生が様々なことを説明してくれたおかげで、もっと自然な発音で話せるようになりたいから、帰国したら、ネットでドラマやニュースを聞いて、シャドーイングを続けたいと思う (Pさん)

学習者のコメントには、音韻知識の活用、意識化、問題発見、学習の継続などが示唆されており、前述した能力の向上に関与しているように思われる。また、授業に参加していたNSボランティアの以下のコメントから、発音クラスを受講していた学習者が発音以外のクラスでも発音を意識していた様子が見てとれる。

モデル文を聞く際には、新しく学ぶ文型に注意しながら、アクセント核がどこにあるか、またはないのか、イントネーションがどうなっているか、ポーズがどこにあるか、清濁の区別などに注意してメモをとっていました。私が驚いて「発音のクラスで学んだことをここでも活用しているんだね」と声をかけると、「はい、日本語の発音は難しいので、注意して聞かないといけないと思います。そうしないと、自分の話が伝わらないだけでなく、相手の話していることを誤解することにもなるので」と言っていました。Lの発音にはまだまだ多くの指導が必要だと思いますが、Lはそのことを自分でもよくわかっていて、今学期も発音に関わるクラスを受講しているということでした。(中略) Lの発音に対する取り組み方から、日本語を上達させるために発音を学ぶことからスタートした学習が、「発音を上達させたいから」もっと日本語を学びたいと、発音が日本語を学ぶための動機となっているような気がしました (Tさん)

このコメントで指摘されているように、発音が学習意欲の維持・向上に関与するならば、日本語能力の向上にもプラスに働くことが予想される。実際、ほかにも友達の結婚式で久しぶりに会った友達に前より発音がよくなったと言われたり、行きつけのレストラン

の店長に最近発音が上手になったと褒められたりして、学習意欲が向上したというような事例も見られたことを補足しておきたい。

6. まとめ

本論考では、音声教育が日本語教育の諸領域と関係することについて言及した上で、筆者自身の音声教育観について述べた。その上で、早稲田大学における教育実践例を挙げ、音声教育が育成する能力について論じた。

日本語学習者の多様化に伴い、学習目的も多様化している。本論考で紹介した事例のように、学習者が目指す日本語能力には高度の音声習得が求められることも多くなっている。このような現状において、音声教育が目指すのは単なる発音上の正確さではなく、日本語能力の向上を支える音声表現力の育成であると考えられる。

注

- 1 とだ・たかこ（早稲田大学大学院日本語教育研究科・教授）
- 2 紙面の都合上、具体例は割愛するが、詳細は戸田（2008）を参照されたい。
- 3 本稿で繰り返し現れる「学習者が外国語を学習する際に見られる母語もしくは特定の言語の影響を受けた音声」のことを便宜上「訛り」と呼ぶが、字数の節約のためであり、偏見や差別的な意味を含むものではない。
- 4 活動内容は戸田（2004）を参照されたい。
- 5 練習方法は自作教材『日本語でシャドーイング』を参照されたい。2010年11月現在、<http://www.gsjal.jp/toda/shadowing.html> で公開中である。

引用文献

- 羽澤志穂（2008）『非母語話者俳優の台詞の音声に対する母語話者の評価と日本語音声教育』日本語教育研究科修士論文、早稲田大学。
- 助川泰彦・池田伸子・三浦香苗・佐藤琢三（2009）「日本語音声の教育と研究の新しい流れ」<http://www.soc.nii.ac.jp/nkg/journal/tokushu.htm>（2010年12月17日）。
- 戸田貴子（2004）『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク。
- TODA Takako (2006) Focus on form in teaching connected speech. In J.D. Brown & K. Kondo-Brown (Eds.) *Perspectives on teaching connected speech to second language speakers* (Chapter 11). Honolulu, HI: University of Hawaii Press, pp. 187-203.
- 戸田貴子編著（2008）『日本語教育と音声』くろしお出版。
- 戸田貴子（2009）「日本語教育における学習者音声の研究と音声教育実践」『日本語教育』142号、pp. 47-57.